松沢哲郎のこと(7)

小嶋祥三

松沢が京都大学を訴えた。栄誉と称賛のトレッドミルに再び這い上がろうとしているのだろうか。かれの経歴や性格を考えると、そうする以外の道はなかったのかもしれない。毎日新聞の記事に以下の文章があった。

訴状によると、工事契約について松沢氏は「必要な設備を新たに契約するという認識だった」と不正を否定。懲戒処分の理由についても、具体的にどの行為が監督不十分だったのか示されておらず不当としている。

この記事を読んで思うのだが、契約の内容を正確に認識していないというのは考えにくいし、下がやったのなら「監督不十分」にならないのだろうか。「監督不十分」の具体的な点を問題にしているが、松沢は、監督をしなかったならば、当然責任を問われるので、適切な監督をしたと言っているのだろう。そうであるならば、今回の研究費の不正は下の友永らが勝手にやったことだと、主張していることになってしまう。裁判の結果については分からないが、よくある下が責任をとるといったパターンのようにみえてくる。この問題を話題にすると、多くの人は友永が可哀そうだという。そこに松沢－友永の関係が読み取れるように思う。友永がこの問題にどう対応しているか知らないが、かれは自立した人間、研究者ではないのだろうか。

松沢は恥を上塗りすることにならなければいいが。